アルタイ・テュルク系烏孫とモンゴルの狼烏伝説の比較研究

那木（なむ）　吉拉（じら）（中央民族大学モンゴル言語文学系）

古代から近代にかけてアルタイ系諸民族には狼と烏の信仰があり、それにまつわる神話伝承も伝えられていたようである。本稿ではテュルク系の烏孫国の始祖昆莫（kun-mo）の伝説とモンゴルにおける類似の狼烏伝説について、その信仰の由来及び実態を検討する。さらに、モチーフを抽出し、烏孫の狼烏伝説と古代ローマの建国神話との比較を試みる。

1.　烏孫国の始祖昆莫の伝説について

烏孫というのは中国の漢代から南北朝初期（紀元前約３世紀から紀元約４世紀）にかけて西域にいたアルタイ語系テュルク系の民族である。烏孫の最盛期の支配領域はイシッククル湖畔およびイリ川を含む天山山脈の北側の地域であった。

ところで、烏孫の人類学上の帰属について、唐代の顔師古は『漢書・烏孫伝』に次のように注釈している。「烏孫于西域諸戎，其形最异，今之胡人，青眼赤須，状類彌猴者，本其種也」。すなわち、「烏孫及び西域の諸戎はその姿形が非常に異なる。今日の胡人[1]は青目、赤髭で、アカゲザルと似ているし、もともとはその種である」。中国の学者たちは新疆の昭蘇県の烏孫の墓から発掘された烏孫人の頭骨を研究して、烏孫人にはコーカソイドの特徴もあれば、モンゴロイドの特徴もあるいう［王明哲（他）1983：43］。また、たとえば、ロシアの学者Aristovは烏孫を唐代の突厥種努失畢、すなわち、現代のカラキルギスと考えた。白鳥庫吉は「烏孫に就いての考」という論文で、烏孫の狼信仰と言語及びその拠った地方の研究により、烏孫はテュルク諸族のキルギス 部族の属し、今日のカラキルギスはその苗裔であろうと結論している。三品彰英は、烏孫が「インドゲルマン系とトルコ系の混血ではないか、その言語とともにトルコ系であったと考えて大過ない」という［三品1971：410］。現在、烏孫をカザフ族の祖先とする主張が強まっている［『哈薩克族簡史』：40］。

[1] 古代中国人（漢人）は北方、あるいは西域の諸民族族を「胡」と総称した。ここで、顔師古は唐代のある突厥族を指しているようである。

さて、『史記』や『漢書』などによると、烏孫は他のアルタイ・テュルク系諸族、モンゴル諸族と同様狼信仰とそれに関連する神話伝承も伝えていた。そのなかで、もっとも早い記録は烏孫についてである。烏孫の伝説では狼と烏が同時に登場していることが特徴的である。司馬遷の『史記』には次のようにある。

烏孫在大宛東北，可二千里。行国，随畜，与匈奴同俗。……是后天子数問騫大夏之属，騫既失侯，因言曰：“臣居匈奴中聞，烏孫王号昆莫[2]。昆莫之父，匈奴西邊小国也。匈奴攻殺其父，而昆莫生弃于野。烏嗛肉蜚其上，狼往乳之。単于怪以為神，而收長之。及壮，使将兵，数有功，単于復以其父之民予昆莫，令長守于西城（域）。昆莫收養其民，攻旁小邑，控弦数万，習攻戰。単于死，昆莫乃率其众遠徙中立，不肯朝会匈奴。匈奴遣奇兵擊、不勝，以為神而遠之。”［司馬遷 1972：3168］

この烏孫国の始祖昆莫伝は、班固の『漢書・張騫伝』には次のようにある。

天子数問騫大夏之属。騫既失侯，因曰：“臣居匈奴中，聞烏孫王号昆莫。昆莫父難兜靡本与大月氏俱在祁連、敦煌間小国也。大月氏攻殺難兜靡，奪其地，人民亡走匈奴。子昆莫新生。傅父布就[3]翎侯[4]抱亡置草中，為求食，還，見狼乳之，又烏銜肉翔其旁。以為神，遂持歸匈奴，単于愛養之。及壮，以其父民衆與昆莫，使将兵，数有功。時，月氏已為匈奴所破，西擊塞王。塞王南走遠徙，月氏居其地。昆莫既健，自請単于

---

[2] 『漢書・西域傳』補注には「昆莫王號也，名獵驕靡，後書昆彌云」という。「昆彌」と「昆莫」は烏孫語の同音の異訳である。

[3] 「傅父布就」について、服虔は「傅父、如傅母也」、李奇は「布就，字也。翕侯，烏孫官名也。為昆莫作傅父也」とそれぞれ解釈したが（トル）、顔師古は「翎侯，烏孫大臣官號，其數非一，一猶漢之將軍耳。而布就者，又翎侯之中別號。非其人之字。翎與翕同。」と解釈した。《漢書》卷六一《張騫傳》，中華書局，1962 年版、第 2692 頁参照。（［《漢書》卷六一《張騫傳》1962：2692]）。三品彰英は、伝説中傅父とあるのは顔師古注に「服虔曰、傅父、如傅母也」といって（言って）いるが、今これを神話的立場から考えるも、母と見るのが原の形に近くはならかろうか」と言った。三品彰英『神話と文化史』、平凡社、1971：410―411 頁参照。

[4] Hirthは「翕」を廣東音に従ってyap とし、「翕侯」を yap-hanと読み、突厥の官名「葉護」と同音の異訳を考えた。これについて、白鳥庫吉は「これは疑もなく貴重な発見で、烏孫語は之によって一語を増やすことになったと共に、烏孫民族の種類を定めるに屈竟の材料を供せられたものと言わねばならぬ」と言った。白鳥庫吉著「烏孫に就いての考」、昭和 16 年、『西域史研究』上、岩波書店、第 62 頁参照［白鳥庫吉　1941：62]。

報父怨。遂西破大月氏。大月氏復西走，徙大夏地。昆莫略其衆，因留居。兵稍強，会単于死，不肯復朝事匈奴。匈奴遣兵擊之，不勝。益以為神而遠之。”［班固 1962：2691－2692］

『史記』と『漢書』に同じ伝説が記録されているが、いずれも前漢の使節張騫（～紀元前 114、字[5]は子文、 陝西漢中の人 ）によって伝えられたものである。漢の武帝は即位して、匈奴の西側の大月氏と軍事同盟を結び、匈奴を挟撃するため、紀元前 139 年に張騫を大月氏に使者として派遣した。張騫は途中で匈奴に捕囚され、11 年後に脱走して、大宛、康居[6]を経て大月氏に達し、紀元前 126 年、13 年目に帰還した。『史記』と『漢書』によると、烏孫国の始祖昆莫伝を張騫は匈奴に囚われている間に採録したという。しかし、内容は前者は簡単で、後者がより詳しく、また、相違が見られる。前者に拠れば､昆莫の父を殺したのは匈奴であって、後者と異なる。ただ、昆莫が狼と烏に救われたという核心モチーフでは一致しており、成長してから匈奴の支配を離れ、諸部族の同盟を図って、当時の中央アジアに強大な烏孫国を建てたという点で両者は一致している。

次表は『史記』と『漢書』による烏孫国始祖昆莫伝の比較である。

史書／モチーフ	『史記』	『漢書』
1	烏孫の王、昆莫の父は匈奴に攻められて殺された。	烏孫の王、昆莫の父は大月氏に攻め破られ、民は匈奴に亡命した。
2	昆莫は生きたまま捨てられた。	翕侯は亡命途中で昆莫を草の中に置いた。
3	烏が肉をくわえ、その上を飛び、狼が乳を飲ませ、昆莫を救った。	狼が乳を飲ませ、烏が肉をくわえてその傍に飛んで、昆莫を救った。
4	単于は昆莫が神ではないかと思い、引き取って育てた。	翕侯は昆莫が神ではないかと思い、抱いて匈奴へ帰順した。単于は昆莫を育てた。
5	昆莫は軍隊を率いて、何回も軍功をたてた。そこで、単于はその父の民を昆莫に譲渡し、西域を守らせた。昆莫はそこで数万人を支配し、さらに遠くへ	昆莫は大月氏を攻め、その民を奪い取った。そこに駐留したが、匈奴に臣服しようとしなかった。烏孫国を建てた。

[5] 字（あざな）、古代中国人の実名のほかにつける別名を指す。

[6] 康居：漢、魏時代の史書に見える中央アジアのテュルク語系遊牧民。シル河下流地域からキルギス平原に拠った。

	移り、匈奴へ朝貢しなくなった。	
6	匈奴は騎兵を派遣して昆莫を攻めたが、勝てなかった。神ではないかと思い、遠くへ離れ去った。	匈奴は兵を派遣して昆莫を攻めたが、勝てなかった。さらに、神ではないかと思い、遠く離れ去った。

このように史書に記された烏孫国の始祖昆莫伝では、遺棄された子供を動物が育てるという神話的なモチーフを別とすると、史実は明白でない。たとえば、烏孫の難兜靡とその子昆莫の年齢、「昆莫」とは烏孫王の称号であるがその実名は明らかでなく、また、単于は匈奴の何代目の君主であるのかなどの情報も分からない。その点でこれら伝説は史実をつたえているよりは、口承性の強いものであったと思われる。

さて、モンゴル人の口承文芸のなかにも烏孫の昆莫伝説の類話が見出されている。たとえば、オイラート・モンゴルの英雄叙事詩『ジャンガル』には次のような話がある。

> 主人公のジャンガルが2歳の時荒野に捨てられたが、牝狼が来て、乳を飲ませて、烏が来て物を食べさせていた。ブヘ・モングン・シックシィゲルケィという者がこの子供を見つけて、連れ帰り、育てた[N・hurča　1991]。

モンゴルの歴史にジャンガルという人物がいたかどうかということは、今のところまたはっきりしない。次の伝説に登場するのは、近現代のモンゴル仏教の高僧である。モンゴル語で採録されたこの伝説は概略以下の通りである。

> 19世紀の末頃、モンゴル国のバヤンホングル・アイマグのバヤンゴビ・ソムに、貧しい若い女が、金持ちに雇われていたが、夫がないのに、懐妊して子供を生むことになった。彼女は金持ちに「おれの門戸を侮辱した」と罵倒されて、家から追い出されてしまった。若い女性はある山の洞窟につき、そこで子供を生んだ。そして、赤子をそこに置き、 食物を捜しに出かけた。産後のために彼女は大変難儀をし、その上春の砂塵に見舞われて死にかかった。その時、迷った家畜を捜していた牧民に救われて、その家に連れられて行った。飲食を与えられて、元気をとり戻すと、彼女は「赤ちゃん」「赤ちゃん」と叫ぶ。産後であることを知って、人々は彼女について山に登り、その洞窟に入ろうとすると、入口から烏が飛び出し、狼が走り去った。「烏は赤子の目を啄ばみ、狼は子供を食ってしまった」と人々が洞窟の奥まで行くと、赤子は母の乳を飲んだばかりように唇に乳の零がついていて、満腹気で目を大きく見開いていた。その狼と烏に養われた小児はあの地域で名高いジャムブル・ジョンツイというラマ僧である[hadagin gotob-un agim　2002：92-93]。

興味深いことに、この伝承と古代の烏孫の話は、驚くほど似ている。この伝説のジャムブル・ジョンツイは前世紀の中頃まで活躍していた名の知られた高僧であった。モンゴルでは著名な高僧の出自について、最近までいろいろな伝説が作られてきた。この高僧の伝説はその一例であると思う。遥かな昔から、狼と烏が捨てられた小児を救うという神話的なモチーフはモンゴルなどアルタイ語系諸族の間に伝えられてきて、時代によって、実在の人物と結びつき、新しい伝説が作られきたということであろう。

2.　烏孫とモンゴルの伝説における狼と烏

動物が人間の子供を育てるということは神話伝承の世界だけの話ではない。[7] しかしながら、神話伝承に登場する動物たちは神性をもつ超自然的な存在であり、特定の部族集団の信仰対象になっていたのではないかと考えられる。具体的に言えば、烏孫やモンゴルの祖先である部族は狼や烏などの動物を祖霊として崇拝し、集団の象徴としていたかも知れない。神話伝承はその信仰習俗を物語の形で示唆しているものと思われる。また、『漢書・西域伝』によると、烏孫には「拊離」(fu-li) と称す王がいた［班固 1962：1295］。「拊離」はもちろんBöriの音訳で、古代テュルク語で「狼」を指す。「狼」という名前が付されていることは、狼を対象として崇拝していたことを裏づけるものではなかろうか。なぜなら、特定の動物を自己の祖霊（トーテム）として崇拝し、その動物名を冠する命名習俗が古代のアルタイ系諸族にはあったからである。

それに加えて、烏孫には烏の信仰習俗もあり、それが昆莫伝説の背景であったものと推測されるが、筆者は管見にしてこれ以外に烏孫の烏信仰を示す資料を持たない。しかしながら、烏孫の苗裔として、11～13 世紀にモンゴル高原に活躍したケレイティという強力な部族が烏信仰を持ち、烏を自己の祖霊としていた。これは烏孫の烏信仰を傍証する一助となろう［那木吉拉 2003］。

ところで、強調したいことは、烏孫などアルタイ系諸民族には狼と烏を共に対象とする信仰習俗があったということである。烏孫の昆莫伝説とモンゴルの伝説はその証左であるが、他にも事例は少なくないと思う。そして、この２匹の動物がセットとして人間の信仰の対象であったということこそ、大自然そのものに由来するものと考えられる。モンゴル

[7] インドには狼が２人の少女を育てたという伝聞があるが、これは稀有なことであると思う。

の猟師[8]の観察によると、狼は獲物を襲ってその肉を食べる時、目をしっかり閉じるという。血液が跳ねて目に入りこむのを防ぐためだろう。しかし、狼は時折、頭をもたげて、木の枝で食べ残しを待っている烏を見る。烏が静かにそこに止ってしていれば、狼は肉を食べつづける［hadagin gotob-un agim 2002：61］という。モンゴルには「狼の先にいつも烏、雨の前にいつも風」（boohai-iyn terigun-dü heriye；borugan-u terigun-du salhi）という諺がある。また、「狼の後をつける烏の如く、食べ残しの骨を待つ犬の如し」（činwa dagagsan heriye šig;jobalga goridagsan nohoi šig）というものもある。このような遊牧民の諺は狼と烏の相互依存を反映している。また、遊牧民は烏の声で狼の接近を判断して、家畜の群れを守ろうとする。豊かな経験を持つ猟師は谷間で烏の声を真似て叫んだり、黒い帽子を上空へ投げたりして、狼をおびき寄せて殺すことがある。

さて、遊牧のアルタイ系諸民族に伝承されてきた狼烏に関わる昔話に触れしよう。

まず、11 世紀に書かれたマフムード・アル・カーシュガリーの『テュルク諸語集成』には次の諺が採録されている。「もし狼が食物を持ってきたら、皆に配って食べられる；もしワタリ烏が食物を持ってきたら、梢で独り食ってしまう」［麻赫黙徳・喀什鳴里 2001：464］。ここには古代ウイグル人の狼に対する肯定的な評価を見てとることができるが、13 世紀半頃の『元朝秘史』には、チンギス・カンが功臣クナンに贈った賛辞が記されている。

「このクナンこそは、

闇夜には［敵もとに忍びよる］雄の狼、

白昼には［敵方を廻り探る］黒き鴉」

となって、「わが陣営の動き立つときには、踏みとどまることなく、わが陣営の踏みとどまるときには、動き立つことなくわが身をばひたすら護り来たって」と［麻赫黙徳・喀什鳴里 2001：464］。また、史書『Altan tobči』にもチンギス・カンのこの言葉は記録されている［Liu jin shuo hargugulj tailburlagsan1980：22］。チンギス・カンの言葉では狼烏は機転と果敢さの喩えであるが、13 世紀のモンゴル人においても狼烏信仰があったことを示していよう。

ところで、烏孫やモンゴルなどアルタイ系諸民族の狼烏信仰はシャマニズムにも深い関わりがあると思う。神話や昔話では、これらの動物は常にテンゲル、即ち天神の使者とし

[8] 狼は家畜の大敵であるから、モンゴルでは毎年狼の撲滅活動が行われ、狼狩りを専門とする猟師がいた。

て現れる。モンゴルに広く伝えられている昔話「boldag ugei boru ebugen」(「だめなボルおじいさん」) では狼と烏はシャマニズムの最高神ホルムスタ・テンゲルの忠実な助手である [Š. gadamba nar　1984 : 798]。また、モンゴルのシャマンの歌には狼と烏はそれぞれ Luus－un hagan (竜王) の乗馬と伝言者として登場する。時によって、烏は竜王の伝言者、狼は遂行者とされている [hadagin gotob-un agim　2002 158－159]。

要するに、狼と烏がアルタイ系諸民族の神話伝承などに登場するのは、自然界における狼烏の観察とそれに由来する信仰の反映であり、また、それが自己の集団の象徴として崇拝されたのかもしれない。

3. 昆莫伝説と古代ローマのロムルス伝説

ところで、狼と烏が共に捨てられた小児を育てるという話は、烏孫、モンゴルの例ばかりではなく、古代ローマの神話にも見られる。すなわち、紀元前 753 年にローマを建設したとされる神話上の人物ロムルス[9]とその弟のレムスは牝狼と啄木鳥に育てられたことになっている。

狼に乳を飲ませてもらうロムルスとレムスと発見した羊飼いたち。祭壇。(アレッツォ考古美術館) [グラント、ヘイゼル『ギリシア・ローマ神話事典』より]

ロムルスとレムスに乳を飲ませる「カピトリーノの牝狼」(ローマ、コンセルヴァトーリ美術館) [グラント、ヘイゼル『ギリシヤ・ローマ神話辞典』より]

このロムルス伝説の概略は次のようである。

[9]「ロムルス」という名前は単に「ローマ人」の意である。

ロムルスとレムスは、アエネアス[10]の子孫であるヌミトルの一人娘レア・シルヴィアの双子の息子である。ヌミトルは弟のアムリウスによってアルバ・ロンガの王位から追われた。

ヌミトルが後継者となる孫を得ることを阻止するために、アムリウスはレア・シルウィアを一生独身を通すウェスタ女神[11]に仕える巫女にしたが、マルス神[12]は聖なる森で彼女を犯した。アムリウスは彼女が妊娠していることに気づくと、彼女を幽閉したが（または溺死させ）、召使いに双子の息子たちをティベリス川に沈めて殺すように命じた。しかし、召使いは情け深く、殺すかわりに 2 人を入れた籠を板の上に置き、洪水で水嵩の増した川に流した。水が退くと板は無花果の木のそばの泥土に漂着した。そこへマルスの使いである牝狼と啄木鳥がやってきて、双子を養った。しばらくして、王の羊飼いのファウストゥルスが双子を見つけ、家に連れて帰った。彼の妻のアッカが２人を育てた。彼らはたくましい若者に成長し、羊飼いの息子たちを率いてその地域の山賊やヌミトルの家畜群を襲った。

後に、ロムルス・レムス兄弟はその祖父の治めるアルバ・ロンガに住むことに満足せず、まだ 18 歳に過ぎなかったが、自分たちの都市を建設する決心をした。彼等は自分たちが捨てられ、狼と啄木鳥に救われたティベリス川付近の場所を選んだ。しかし、彼等はどちらが建設作業の責任をとるか、そしてどちらが都市の正式の建設者になるかで争った。最終的にロムルスは弟のレムスを殺してしまった。

それから、ロムルスは新しいローマを建設した。その後、新しい都市をめぐって、さまざまな出来事が起こったが、ロムルスはローマを守って、ついに、ローマ人とサビニ人の連邦国家を興し、ローマを首都にした。40 年の後、平和で繁栄した統治を終えて、ロムルスはこの世から姿を消した。すなわち、カムブス・マルティウス（マルスの平原）で閲兵中、激しい雷雨が起こり、ロムルスは雲に包まれ、人々の

---

[10] アエネアス：ホメロスの叙事詩『イリアス』に登場するトロイアの英雄。トロイア陥落後の物語はホメロス以後に創出され、彼をこのロムルスと結びつけた。

[11] ウェスタ： ローマ神話で竈の女神で、神像はなく、火が崇拝の対象である。ローマの神殿では「永遠の火」を清純な処女が護った。

[12] マルス神：ローマ神話の戦神である。ジュピター・クイリヌスと共に国家の三主神を形成する。ここではロムルスの父と伝える。

視野から姿を消した。人々はすぐに、歓呼して、彼は神になったのだと喝采した。その後しばらくして彼は人ならぬ姿で現れ、ローマは万事順調にいくだろうと請け合った。そして、ローマ人は彼をクウイリヌス神として崇拝するようになった［マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル 1998：594-597］。

このロムルスの伝説は古代ローマ人の狼信仰を示唆するものであろう。狼はマルス神が使わした聖獣として古代ローマ人に崇拝され、狼はローマの象徴のひとつになった。

また、ローマに貨幣ができると、牝狼の乳を飲む兄弟はその図柄になった。

古代ローマに狼の信仰があったのは事実であったが、啄木鳥がどのような存在であったかははっきりしない。

ところで、神格化された動物が捨てられた小児を育てるという話は世界各地にたびたび見られる。たとえば、ギリシア・ローマ神話には捨てられたテレボスが牝鹿に育てられたという話があり、キルギスなどアルタイ系諸民族にも同様の話が伝わっている[13]。その他、インドには牝獅子と牝虎が捨てられた小児を育てたという話がある。しかしながら、それらの伝承には一匹の動物しか登場しない。昆莫伝説とロムルス伝説では狼烏が対になって出てくる。この点で両者は共通している。また、狼烏に育てられたのが実在の人物で、いずれも建国の祖として歴史に名を残している。それだけにとどまらず、細部にも共通する要素がある（表）。このことから、両者は同一の原型に由来したものではないかと推測されるのであるが、それを裏づける資料は手に入れていない。

ところで、ロムルス伝説はギリシア神話に基づいているが、ギリシア神話というのは紀元前 9 世紀頃のギリシアの吟遊詩人ホメロスの英雄叙事詩　『イリアス』、『オデュッセイア』、紀元前８世紀頃の詩人ヘシオドスの『仕事と日々』、『神統記』によって洗練され、体系づけられたものである。したがって、時間の流れからみれば、ローマの神話伝承の記録は烏孫の伝承より早い。しかし、これだけで、昆莫伝説がロムルス伝説より遅く、前者は後者によって影響されたと結論をするわけにはいかない。

（表）烏孫の始祖昆莫とロムルスの伝説のモチーフ比較

---

[13] キルギスについては、滿都呼主編『中国阿爾泰語係諸民族族神話故事』（民族出版社，1997 年版）に「鹿聖母」「神鹿」などの異伝がある。

史書 モチーフ	昆莫伝説（『漢書』）	ロムルス伝説
1	烏孫の王、昆莫の父は大月氏に攻められ、人民は匈奴に亡命する。	ロムルスの祖父ヌミトルはその弟のアムリウスによって、王位から追われる。
2	翕侯は昆莫を抱いて亡命する途中、草の中に置いて、食物を探しに行く。	召使いはロムルスとレムスを殺そうとつれていく途中で、殺さずに川に流す。
3	（天神の使者である）牝狼と烏がやってきて、昆莫を養う。	マルス神の使いである牝狼と啄木鳥がやってきて、ロムルスとレムスを養う。
4	翕侯は昆莫が神ではないかと思って、抱いて匈奴へ帰順した。単于は昆莫を育てた。	王の羊飼いはロムルスとレムスを見つけ、王には言わずに家に連れて帰って育てた。
5	昆莫は仇を討ち、大月氏を攻め滅ぼし、その民を支配した。	ロムルスはアムリウス王を殺して、仇を討った。
6	昆莫はそこに駐留し、匈奴に臣服しせず、部族同盟をつくって、強大な烏孫帝国を建設した。	ロムルス等はそのアルバ・ロンガに住むことに満足せず、ティベリス川付近に都市を建設した。後にローマを首都とする国家を成立させた。
7	匈奴は兵を派遣して昆莫を攻めたが、勝てなかった。さらに神ではないかと思い、遠く離れ去った。	ロムルスは神になって、ローマ人は彼をクウイリヌス神として崇拝するようになった。

ところで、烏孫とローマの話にみられる共通性には古くから注意が払われてきた。白鳥庫吉は烏孫の人種起源について論じ、烏孫と高車や突厥などテュルク諸族の狼神話に注目し、「羅馬の始祖 Romulus と Remus も矢張狼に育まれたことは、善く人に知る所である」と付言している［白鳥 1941：57］。

また、旧ソヴェート連邦のネグマトフによると、「７～８世紀のオアシス都市国家ウスルシャーナ（現在のタジキスタン国内）の首都ブンジカトの王宮址で興味深い壁画を発見した。それにはロムルスとレムスが狼の乳で育てられている光景が描かれていたからである。これと同じ図の鋳造銅貨がビザンツ帝国のユスティニアヌス一世の治世（527～565）に発行され、また、それを押型にした黄金のさげ飾りがウズベキスタンで発見されていることからして、上述の『ローマ的パターン』は、ビザンツ帝国をへてここ中央アジアの地に伝えられたので

ある」［護雅夫 1992：340－341］。

加藤九祚はネグマトフこの説を紹介して、さらに次のように記している。「一方、テュルク･モンゴルの世界でも、部族の始祖がオオカミであるとの伝承が残っている。 ネグマトフによれば、この神話はそもそもイランに発生し、西はエルトリア（エトルリア？―護雅夫）を経てローマに入り、東はテュルク･モンゴルの諸族に広まった。そしてこの壁画に見られるようなローマ的パターンは、ローマからビザンツを経て、すでに受け入れのための素地のある中央アジアに入った。いわば、このモチーフは、イランからローマを経て中央アジアまで一周したわけで、それに要した期間は約 1500 年と考えられている」[14]と。

これに対して、護雅夫は、ここで、「ネグマトフのいう『この神話』がいかなるものであるか明らかでない。ただ、それが、ロムルスとレムスの神話におけるような、男子が狼の乳で育てられたことを伝えたものであるならば、それは、烏孫の王子が狼の乳で育てられたという伝承とは軌を一にするものの、いま問題にしているモンゴル民族・テュルク民族のそれと異なるといわざるをえない。ロムルスとレムスは、ただ狼に育てられたにとどまり、その神話は、獣祖神話でもなければ、人獣雅夫成婚神話でもないからである［護雅夫 1992：340－341］。

護雅夫によると、テュルク、モンゴルのそれよりも、特に烏孫の話がロムルスの説話と一致しており、従って、結局、今のところアルタイ系諸民族でローマの話と共通するのは烏孫の話しかない。問題は、この共通性はどのようにして形成されたのかということである。

さて、東西文化交流はシルクロードによって、遥か昔から行われていたのは事実である。鈴木治が「絹路補考」という論文で、ギリシアにおける絹布の使用は紀元前 5 世紀に遡り、従って、東西絹路の開発は、紀元前 2 世紀の張騫西行を遥かに遡るとして、絹路の問題は、本質的には「東西文化の交渉」であると指摘した［鈴木治　1974：292］。烏孫、匈奴などの民族は中央アジアのシルクロードに位置して、また、烏孫がコーカソイドではないかという主張が高まっているが、仮にそうであるとすれば、烏孫には本来インド・ヨーロッパに固有の文化的な要素が存在していたはずである。

---

[14]　加藤九祚『中央アジア遺跡の旅』、NHKブックス、1979。護雅夫「古代一テュルク部族(高車)の始祖説話について」『古代トルコ民族史研究Ⅱ』、1992 年、山川出版社、340p. より再引用。

結び

遥か昔から近代にかけて、中央アジアには狼と特定の鳥に対する信仰があり、それに対応する神話が伝わっていた。その例は烏孫とモンゴルにある。ところで、烏孫の跡を受けて歴史の舞台に登場した突厥などテュルク系諸族の神話伝承にも捨てられた小児が牝狼に育てられ、長じてからその狼と交わり、部族の始祖を生むというモチーフが頻繁に出てくる[15]。このように、テュルク、モンゴルなどアルタイ系諸民族には、「哺乳型」、即ち、狼が捨てられた小児を育てる神話伝承と「婚姻型」、即ち、捨てられた小児を育てて、成長してから結婚して部族の始祖を生むという神話伝承があった。そして、「哺乳型」の神話伝承では、烏孫とモンゴルの事例だけに狼と烏が登場する。このことから、モンゴルには狼と烏を対とする信仰があったものと想像される。

また、この「哺乳型」の烏孫、モンゴルの例だけに古代ローマの神話伝承との共通性が見られる。この共通性は古代ユーラシア大陸における特定の民族集団の間の文化交流史から説明できるであろう。

参考文献

１．モンゴル語

hadagin gotob-un agim, 2002 on ,〈 tengri-iyn nohoi〉, öbör monggol-un arad-un heblel-un horiya, 61duger nigur.(ハダギン・ゴトブ・アギム著、2002 年、『天の犬』、呼和浩特, 内蒙古人民出版社)

N・hurča, 1991on, 〈darhad-un hereid hemehu obug-un nereidul-un učir〉, 〈öbör monggol-un bagši-iyn yehe surgaguli-iyn erdem šinjilegen-u setgül〉 3dugar hugučaga (N・ホルチャ 1991「ダルフディ部族のケレィティ氏族の名称について」、呼和浩特、『内モンゴル師範大学学報』、第 3 期

Liu jin shuo hargugulj tailburlagsan、1980 on 、〈had-un öndösun-ü huriyanggui aldan tobči〉, öbör mongol-un arad-un heblel-ün horiya, 22dugar nigur. (留金鎖校訂、注釈, 1980 年,『黄金史綱』、呼和浩特, 内蒙古人民出版社)

Š.gadamba nar 、1984 on、 〈mongol arad-un aman johiyol-un degeji bičg〉(dooradu),öbör mongol-un arad-un heblel-un horiya, , 798dugaar uigur. (シャ・ガダンバ等編、1984 年、『モンゴル口承文学精華集』下、呼和浩特, 内蒙古人民出版社)

---

[15] 突厥の狼祖神話は『周書・突厥傳』『北史・突厥傳』『隋書・突厥傳』『通典・突厥傳上』などのに記されている。

hadagin gotob-un agim、2002 on、< tengri-iyn nohoi>, öbör monggol-un arad-un heblel-un horiya, 158－159düger nigur。(ハダギン・ゴトブ・アギム著, 2002 年,『天の犬』、呼和浩特, 内蒙古人民出版社)

２．中国語

班固　1962　「張騫傳」『漢書』巻六一北京　中華書局

班固　1962　「西域伝」『漢書』巻九六　北京　中華書局

麻赫默徳・喀什鳴里　2001　『突厥語大辞典』第 1 巻　北京民族出版社

那木吉拉　2003　「古代突厥語族諸民族族烏鴉崇拝習俗興神話伝説」『民族文学研究』第 4 期、北京

編寫組　1987　「哈薩克族簡史」『哈薩克族簡史』烏魯木齊　新疆人民出版社

「張騫傳」1962　『漢書』巻六一　中華書局

司馬遷　1972　「大宛列傳」『史記』巻一二三、北京　中華書局

王明哲、王炳華　1983　『烏孫研究』　烏魯木齊　新疆人民出版社

３．日本語

白鳥庫吉　1941　「烏孫に就いての考」『西域史研究』上　岩波書店

三品彰英　1971　『神話と文化史』　平凡社

護　雅夫　1992　「古代テュルク部族(高車)の始祖説話について」『古代トルコ民族史研究Ⅱ』山川出版社

マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル（西田実・主幹訳）
1998　『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店